



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	未完結文の使用における語用論的条件
Author(s)	劉, 曉萃
Citation	研究論集, 14, 143(左)-160(左)
Issue Date	2014-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57696
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_009_Liu.pdf



未完結文の使用における語用論的条件

劉 曉 萃

要 旨

本稿は、語用論という観点から、接続助詞で終わる未完結文の典型的なパターンを中心に、外的要素と内的要素に分けて未完結文の使用にどのような制約があるのかを考察する。

まず、伝達の媒体（話し言葉と書き言葉の違い）における未完結文の使用を明確にする。未完結文は文法形式上に不完全であるので、書き言葉では使用しづらいと予測される。

そして、話し言葉に限定した上で、未完結文が公的な場面で使用しづらいという仮説を以って、発話の公式度に関与する要素を明らかにする。言葉という文法形式を基準として考えるなら、発話に関わる要素は大きく内的要素と外的要素の二種類に分けて考えられるので、本稿は外的要素（「聞き手の性質」や「社会的な人間関係」「心理的な人間関係」からなる）と内的要素（「発話の内容」）に分けて発話の公式度との関係を考える。

最後に、実際の使用状況に基づき、本稿は「ので／んで」「から」「たら」「ば」「と」「のに」「が／けど」「し」「て」を対象として、テレビドラマを中心に、ランダムに131個の未完結文を抽出し、「発話の内容」「発話場所」「潜在的聞き手の存否」「社会的な人間関係」の四つの項目に分け、個々の表現に現れる特徴を分析し、各要素の間にある関係を明確にする。

1. はじめに

私達は日常会話で必ずしも文法の規則通りに言葉を使用しているわけではない。むしろ、文法の規則から逸脱することこそ話し言葉の特徴であると言える。例えば、語順の変換、省略、言いさしなど。書き手と文字化した言葉という情報しか含まない書き言葉より、話し言葉は場面性が強く、言葉自体のみならず、会話参加者の属性や個性、会話を行なう物理的場面などもある意味で言葉としての性質を持っている。そこで、会話を通して伝達された意味は、言葉の

文字通り以上の意味を持つ場合が普通である。言い換えれば、会話では、話し手は意味や意図を伝達する際に、言葉を通してすべて明確に話さないことも多い。それはどの言語にも見られる現象であるが、日本語の日常会話では、言い切ることより、文末に言い切らないような発話がより頻繁に用いられている。しかし、未完結文は日常会話で頻繁に用いられているのが事実であるが、それがどんな時も問題なく使えるか、あらゆる場面に一律に言えるかという問題点が残っている。例えば、(1)の場面で、未完結文の(1)a'の容認度が下がる。そこで、本稿は、未完結の言い切らないような表現があらゆる場面が使えるか、そうでないなら、どのような制約があるかを明確にすることを目的とする。

(1) 【秘書は頭取の命令を受けて半沢を連れて訪ねる場面、頭取の事務室の外で】

a 秘書「営業第二部半沢次長がいらっしゃいました。」

a' *秘書「営業第二部半沢次長がいらっしゃいましたから。」

TBS 系列『半沢直樹』第6話

2. 先行研究と問題点

言い切らないような発話は今まで言いさしというテーマで行なう研究がほとんどである。言いさしについては、代表的なものである白川（2009）をはじめ、個別の表現であれ、系統的な記述であれ、言いさしの機能に関する研究がほとんどである。管見では、言いさしの使用場面などについての議論が少ない。

加藤（2009a：70-71）は日本人の「文を閉じたくない」ということについて、「ゆったりした雰囲気を使う文体ということなら、むしろ適切だとも言えるくらいである。しかし、逆に言えば、これは仲間内での非公式の話し方として許されるものであって、公式の場で厳密さや厳格さが重要となる場合にはそぐわない」と述べている。そこで、加藤（2009a）によると、言いさしは公式の場で使用しにくいことがわかる。

金（2007）は調査に基づき、接客によく用いられている非定型表現をまとめた中で、「接続助詞終了型」を一つの種類として述べた。そこで、未完結文は接客の場面で使用可能であると推測できる。

上原・福島（2004）は普通体と丁寧体の「裸の文末形式」について考察し、「聞き手を意識しない状況での独話や回想」の場合、「相手に対する待遇意識が一時的に消える状況」のときに「独話的なニュアンス」を伴う場合、「相手の求める情報なり、自分の表明・伝達したい情報なりを提示するのみで用が足りる」（上原・福島 2004：109）場合が「裸の文末形式が用いられている」と述べている。未完結文は接続助詞などで終わることが多いので、上原・福島（2004）の研究は、未完結文が「裸の文末形式」のよく使用される場合で、逆に使用が制限されているという

可能性があることを示唆している。

以上から分かるように、未完結文の使用上の制約についての先行研究が少なく、ほとんど触れる程度である。加藤(2009a)は未完結文が公式の場で使用されることが少ないとまとめたが、公式の場とはどのような場を指すのかを議論していない。そこで、本稿は、公式の場に関与する要素を明確にし、未完結文の使用状況を詳しく分析する。

3. 本稿の研究対象

まず、形式上から、未完結文は主節欠如と述語欠如の二種類に分けられるが、本稿は主節欠如に限定する。加藤(2013)は統語論の観点から、従属節を連体修飾節と連用修飾節の二種類に分けている。しかし、本発表では研究対象を連用修飾節に限定するが、実際の運用状況を考慮した上で、研究対象を「ので／んで」「から」「たら」「ば」「と」¹「のに」「が／けど」「し」「て」²に限定する。

そして、未完結文は結果として現れるもので、その欠如の理由は様々あるが、本稿は(2)のような割り込みによる場合と、(3)のような話し手自身の発話に倒置された場合を除外する。

- (2) 半沢「このままでは金融庁検査で問題ありと仕分けされ、今後の融資が継続できなくなる可能性もございます。そうなりますと…」

羽田専務「そうならないようにするのがあなた達の役目でしょ。」

TBS 系列『半沢直樹』第 6 話

- (3) 同僚「悪かったな。厄介事を押し付けちまって。」

半沢「まったくだ。今度おごれよ。」

TBS 系列『半沢直樹』第 6 話

以上より、本稿は未完結文を「発話者の積極的な意思によって、主節が発話者の発話の前後の形式文脈³に現れていない従属節のみで終わる発話である」と定義する。

¹ 本発表では、「と」の引用用法を対象外にする。

² 本発表では「て」の「～てください」と「～ないでください」の使い方を対象外にする。

³ ここでの形式文脈は加藤(2009b)の定義に従う。形式文脈は「同一セッションの内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる」ものである。(加藤 2009b: 214)。

4. 未完結文の使用における制約

4.1 伝達の媒体における制約

伝達の媒体は情報を伝達する手段を指し、大きく発話と文字の二つが考えられる。いわゆる書き言葉と話し言葉の違いである。言葉の使用は発話のみならず、文章でも可能なので、ここではまず伝達媒体の違いに注目して未完結文の使用を確認する。

未完結文は基本的に話し言葉でしか用いられず、書き言葉では使用しにくい、その理由は概ね二つ考えられる。

一つは、書き言葉における聞き手の不確定の性質による。未完結文が主節の省略による場合が多いということからわかるように、未完結文を理解するには、省略されている主節を補完することが聞き手に要求されている。そこで、未完結文に関する話し手と聞き手の共通認識が必要となる。典型的な書き言葉は、話し手が発話する時点と聞き手が反応する時点に比較的長い期間のずれがあり、聞き手が不特定であることが多い。そうすると、聞き手の瞬時的な反応を観察することは不可能なので、話し手は未完結文を使用しても、聞き手が理解できるかどうかを確かめることができない。更に、話し手の言葉を読む相手は不確定である以上、話し手と聞き手の共通認識も保証できず、未完結文を簡単に理解できない可能性も高い。

もう一つは、書き言葉に現れる正式性による。正式性は言葉の正確度、即ち言葉が文法の規則に従う程度とも理解できる。典型的な書き言葉は、線条性がないので、言葉の作成において、話し手は時間をかけて作ることができるのみならず、書き終わった言葉を削除したり修正したりすることもできるので、話し言葉より文法の規則に従って作成することが比較的容易である。また、文字の記録として存在するという性質も、書き言葉が文法通りになることを要求する。基本的には、言葉の発生元の属性が公的であればあるほど、言葉の読む相手が多ければ多いほど、書き言葉の正式性が強く、未完結文も使用しにくくなる。例えば、(4)の言葉の発生元は大学という公的機関で、言葉の読む相手は特に限定されていないので、(4)bのような未完結文は使用できない。それに対して、(5)は同じく文字になっている言葉であるが、発生元は事務室に所在する個人で、読む相手も事務室の人に限定されている。同じ事務室に所在する人は比較的親しい関係にあると想像でき、また発話の内容もプライベートの話なので、総合的に考えた上で、(5)aは(5)bのように未完結文にすることが可能である。そこで、(4)と(5)は同じく書き言葉でありながら、(5)より、(4)はより形式的で、未完結文の使用における制約がより強い。

(4) 【大学の学生証の裏に】

a 本証を拾得された方は、本学までご連絡願います。

b² 本証を拾得された方は、本学までご連絡願いたいけど。

(5) 【事務室共有の冷蔵庫に長時間置きっぱなしのものについて】

- a これ、長時間置きっぱなしなので、明日処分します。
- b これ、長時間置きっぱなしなので、明日処分しますから。

以上は理由を分析しながら、伝達の媒体が文字である場合は未完結文が使用しにくいことを確認した。しかし、ネット上のチャットやメッセージ等は文字でありながら、典型的な言葉の性質から逸脱し、話し言葉に近い性質が見られ、擬似話し言葉とも考えられるので、未完結文の使用が可能である。例えば、(6)～(8)の例である。

(6) 【友人同士の line でのやり取り】

ア「明日遊びの日だね。」

イ「朝 10 時迎えに行くから。」

(7) 【twitter でのメッセージ】

「例え付き合っても、仕事だったり試験だったり一緒にいられない時があるのは当たり前のことなんだよね。どちらが悪いわけでもないし、仕方がないことなんだよ。でも、なぜか寂しさが優先されて相手を責めたくなくなってしまうときがあるのを、どうにかできたらいいのにな…」

(8) 【広告のキャッチコピー】

「僕なんか、ホームがあっても、ホームレスですけどね。」

『住まい賃貸 ハウスメイト』

以上より、未完結文は基本的に伝達媒体が文字であるときには使用しづらいが、話し言葉に準ずるような伝達媒体であるなら、容認度が上がることが分かった。次は、文字の場合を除外し、話し言葉の発話において、未完結文の使用にはどのような制約があるかを考察する。

4.2 発話の公式性に関わる各要素

加藤 (2009a) で述べたように、日常会話において、未完結文は公的な場面で使用することが少ない。公的な場面がどんな場面なのかを明確にするために、場面の公式度⁴ に関与する要素は何かあるかを明らかにすることが必要となる。

その問題を解決するために、山本 (2004) の考えが参考になる。山本 (2004) は先行研究を批判的に検討した上で、発話の形成に関与するものとして、「事態」「話し手」「聞き手」「場」の四つの要素を抽出した。本稿では、山本 (2004) の考えを参考し、場面の公式度に関わる要素を外要素と内要素に分けて考える。

⁴ 公式度は、発話における各要素によって総合的に決められる発話の改まり度を指す。

言葉の使用において、場面と発話の内容が関与しているので、言葉という文法形式を基準として考えるなら、発話に関わる要素は大きく二種類に分けられる。一つは、文法形式の内部に存在する要素。基本的に発話の内容を指す。本稿では、こういう文法形式に現れる発話の内容を内的要素と定義する。もう一つは、文法形式の外部に存在する要素。文法形式の外部に存在する要素は、発話の内容と直接的な関係はなく、文法形式とは別次元にあるものである。文法形式の外部に存在する要素は主に場面と人間関係の二つの下位区分が考えられる。本稿では、こういう文法形式から独立的に存在している要素を外要素と呼ぶ。

この外的要素と内的要素は総合的に発話の公式度を決める。次は、それぞれの要素が発話の公式度にどのように関与しているかを考察する。

4.3 内的要素による正式性

内的要素は主に発話の内容のことを指す。明確な境界線を引くのが難しいが、発話の内容の全体的な性質で言うと、大まかに私的な話か公的な話かに分けて考えられる。ここでは、典型的な例として、雑談と仕事に関する例を比べながら、そこに現れる発話の改まり度の違いを考える。

- (9) 川島「そういえば、読モスナップどうでした？ ちゃんと揃いました？」

白雪「まあね。」

フジテレビ系列『FIRST CLASS』第1話

- (10) 【白雪が川島の鞆を見ながら】

白雪「クロエの新作？」

川島「ちょっとママの借りてきちゃって」

フジテレビ系列『FIRST CLASS』第1話

(9)と(10)で、会話に参加している二人は同じで、会話の場所も同じく会社であるが、(9)は仕事に関する内容で、(10)は川島が使っている鞆についての話なので、雑談である。川島は白雪の後輩なので、敬体を使うのが無標と考えられる。川島の発話に注目すると、(9)で敬体を使っているが、(10)は「て」で終わる未完結文と「ちゃう」という表現から、タメ口で話していると判断できる。(9)と(10)で、場所と人物が同じで、発話の内容のみ異なり、(9)の仕事関係の発話で、川島は敬体を使い、(10)の雑談で、川島は常体を使っていることから、雑談より、仕事に関する発話の内容はより正式的であると言えるだろう。

4.4 外的要素による公式性

4.4.1 場面による公式度

場面というのは、発話がどういう物理的な状況で行なわれているかを指す。発話の物理的な状況が発話の公式性に関与するときに、大まかに「会話の場所」と「会話の参加者」の二つの要素が関係する。

まず、「会話の場所」は絶対的な物理空間のことであるが、理論的に考えれば、私的な場所より、公的な場所で行なう発話のほうが公式度は高いと考えられる。但し、会話の場所の変化によって、会話参加者の身分も同時に変わることが多いので、発話の公式度を決める要因として、「会話の場所」は単独的に考えにくい。

そして、「会話の参加者」は主に会話に参加する人数を指す。発話する時点で、話し手は基本的に一人しかいないが、聞き手の人数や性質は一律にまとめるにくい。そこで、本稿は聞き手の性質の違いによって、発話の場面を分類した後に、発話の公式度との関係を考える。

独り言があるように、発話というのは聞き手がいなくても存在しえるものである。そこで、ある発話場面において、聞き手がどんな存在であるかは二つの段階に分けて捉えられる。一つは、聞き手が存在するかどうかであり、もう一つは、存在するなら、明確であるか潜在的であるかである。

まず、一つ目の聞き手が存在するかどうかの判断基準は、話し手が聞き手を意識できるかどうかである。話し手が聞き手を意識できるような発話状況であれば、聞き手が存在する発話と呼び、逆に話し手が聞き手を意識できないような発話なら、聞き手が存在しない発話と呼ぶ。例えば、話し手は自分の部屋で独り言をしゃべるときに、隣の部屋にいる人がたとえその内容を聞くことができるとしても、話し手は意識できないから、その場合は聞き手が存在しない発話とみなす。それに対して、大人数がいる部屋で、たとえ話し手が特に誰かに向かって発話しているのでなくても、自分以外の人がいるということは話し手が意識できるので、その場合は聞き手が存在する発話とみなす。

そして、二つ目の聞き手の存在が明確であるか潜在的であるかの判断基準は、会話の始まりから話し手が発話する前の時間内で、聞き手が会話に参加したかどうかである。聞き手が会話に参加したなら、聞き手が明確な存在であると捉え、一方、聞き手が会話に参加しなかったら、聞き手が潜在的な存在であると見る。例えば、(11)の場面で、「から」という未完結文を言った麻木事務官を話し手として考えるなら、登場人物は久利生検事、麻木事務官、宇野検事の三人が存在するが、話し手が最後にある未完結文を言うまでの時間内で、会話に参加しているのは久利生検事、麻木事務官のみで、宇野検事は会話に参加していないので、(11)で、久利生検事は明確な聞き手で、宇野検事は潜在的な聞き手である。

- (11) 【久利生検事と自分の事務官である麻木は事務室から会社の共用スペースに出て外出し

ようとするところ、宇野検事は共用スペースで座って聞いている場面】

久利生検事「ほら。行くぞ、元ヤン。」

麻木事務官「その呼び方はやめてください。携帯忘れた。」

久利生検事「何やってんだよ。ほら、行くぞ。ヤンキー事務官、レッツゴー」

麻木事務官「だから、ヤンキーやってたのは10年前ですから。」

フジテレビ系列『HERO 2』第4話

ある発話において、聞き手が存在しないか、それとも存在しないのではなく、潜在的に存在しているかという二つの状況は、連続的な関係にある。それを判断する基準は、話し手が聞き手の存在を意識できるかどうかである。例えば、(11)で、宇野検事は会話の参加者である久利生検事と麻木事務官の前に座っているので、存在する潜在的な聞き手であると言えるが、仮に久利生検事と麻木事務官は(11)の会話話を話している最中、その内容が隣の事務室にいる馬場検事に聞かれたとしても、馬場検事が聞いていることは会話参加者の二人には意識できないので、馬場検事が存在している聞き手として考えにくい。

以上の基準に基づき、聞き手が存在するかどうか、潜在的な存在であるか明確な存在であるかによって、発話の場面を表1のようにまとめられる。

表1 聞き手の性質に基づく発話場面の分類

聞き手の人数	聞き手の性質	例
聞き手が存在しない		独話
聞き手が一人存在	聞き手が明確な存在	(12)
	聞き手が潜在的な存在	(13)
聞き手が多数存在	全員潜在的な存在	(14)
	一人のみ明確な存在	(11)
	複数は明確な存在	(15)
	全員明確な存在	(16)

(12) 【一人暮らしをしている亀沢の家で】

亀沢「泊めるのは今晚だけだからな」

赤岩「わかったって、しつこいな。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第3話

(13) 【疲れでソファに横になりながら寝てしまった娘に】

母「だから、風邪引くって。」

(14) 【大人数がいる授業中】

先生「この2年の2学期に書く調査票が一番大事だから、よく考えて保護者と相談して、

ちゃんと自分で決めて記入してくるように、来月の三者面談でこれ使うから。」

『桐島，部活をやめるって』

- (15) 【傍聴者がたくさんいる裁判所で、殺人事件について、容疑者は弁護士を裏切り、検事の質問に対し、犯罪を認めている場面】

検事「あなたはそのことに怒り，絶望し，復習を計画。土屋秀典より毒物を入手。2011年…」

弁護士「何の茶番なんだ。これは！」

検事「黙りなさい！ 私が質問している。2011年6月30日，あなたは徳永家の勝手口より侵入し，鍋に用意してあったスープに毒物を混入，間違いありませんか？」

容疑者「はい。」

フジテレビ系列『LEGAL HIGH 2』第1話

- (16) 【白尾がどうしても城徳という高校に入りたかったという話について】

赤岩「何が何でも城徳に入りたかったんだ。」

母「それは柚子あなたもね。」

柚子「だって，赤岩君も入るって言うし。ねっ」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第2話

聞き手の性質と場面の公式度とは，次のような関係がある。明確な存在である聞き手が大人数いても，場面の公式度が必ずしも上がるのではない。例えば，(16)は明確な存在である聞き手がたくさんいる場面であるが，お互いに常体を使っていることから，比較的親しい関係にあることが推測できるので，発話の場面の公式度が高いとはいえない。それに対して，潜在的な聞き手は，会話に参加にしていないので，話し手との関係は簡単に決めにくい。しかも，その人数が多ければ多いほど確定できない要素も多くなるので，場面の公式度も相対的に上がるはずである。そこで，場面の公式度は潜在的な聞き手の人数と関係があり，潜在的な聞き手が多ければ多いほど場面の公式度が上がる。例えば，(17a)と(17b)は両方とも検事が容疑者に質問をする場面であるが，(17a)より，(17b)のほうは公式度が高いことが容易に判断できるだろう。

- (17a) 【宇野検事の事務室で，事務官と警察官の二人が潜在的な聞き手として存在し，宇野検事は容疑者の犯罪について確認をしている場面】

容疑者「確かに僕はそのおばあちゃんのお宅へ何回も行ってます。でもね，商品を進めたのは最初だけで，後はお喋りの相手してただけですから。」

検事「そうやって相手が気を許すのを待ってたんじゃないですか？」

フジテレビ系列『HERO 2』第4話

- (17b) 【傍聴者が多数いる裁判所で，殺人事件について，検事は容疑者に質問している】

検事「2011年6月30日、あなたは徳永家の勝手口より侵入し、鍋に用意してあったスープに毒物を混入、間違いありませんか？」

容疑者「はい。」

フジテレビ系列『LEGAL HIGH 2』第1話

4.4.2 人間関係による公式度

敬語体系があるような言語であれ、敬語体系がないような言語であれ、私達が使う言葉は話す相手によって異なる。そして、私達は社会にいる以上、人間と人間の間にある関係も社会性が付与される。しかし、人間は同時に感情を持つ生き物でもあるので、他人との付き合いで、個人の感情が働く場合もある。そこで、本稿は社会的な属性と個人の心理や感情に分けて、それぞれ「社会的な人間関係」と「心理的な人間関係」と定義し、人間関係による発話の公式度を考察する。

まず、「社会的な人間関係」は会話参加者の社会的な属性によって決められるものである⁵。社会的な属性は、主に会話参加者の社会的な地位と年齢の上下を指す。社会的な地位については、同じ職場や集団にいる会話参加者なら、職位や集団での上下関係によって決められるが、違う職場や集団にいる会話参加者なら、社会的な地位は平等であると考えられる。年齢の上下については、「社会的な人間関係」は年齢の上下と正比例関係にある。また、社会的な地位は同じであれば、年齢の上下が決め手となる。「社会的な人間関係」は基本的に社会的な地位と年齢の上下の総合関係によって決められるが、年齢の上下より、社会的な地位は「社会的な人間関係」に与える影響がより大きい現象も見られる。例えば、(18)で、年齢上で宇野検事は下位にあるが、社会的な地位は上位にある。宇野検事の常体になっている発話から、年齢の上下より、社会的な地位が優先されると言えるだろう。

(18) 【宇野検事は31歳で、末次事務官は53歳。検事の事務室での発話】

宇野検事「ちゃんと仕事してよ！ 末次さん！ 何、その顔、ちゃんとしなからでしょ！」

フジテレビ系列『HERO 2』第4話

発話の公式度は「社会的な人間関係」と次のような関係がある。「社会的な人間関係」におい

⁵ 話し手と聞き手の社会における人間関係について、Brown & Levinson (1987) は、言語行為に現れるFTAの深刻度に関与する要素として、話し手と聞き手の「社会的距離」(social distance: D)と話し手と聞き手の相対的「力」(power: P)の二種類を述べた。DとPを決める要因が様々考えられるが、本稿ではまず話し手と聞き手の年齢と、ある集団における上下関係に限定して考察する。

て、話し手は聞き手より下位にある場合、しかもその差が大きければ多いほど、発話の公式度が上がり、未完結文の使用もしにくくなるということが推測できる。例えば、(19)で、話し手は半沢で、聞き手は上司である。話し手の「5億と120億では桁が二つ違います」という発話は聞き手に対する反論なので、「5億と120億では桁が二つ違いますけど」とも考えられるが、聞き手より、話し手が下位にある「社会的な人間関係」によってその使用が制限されていると言える。

(19) 【上司は半沢に伊勢島ホテルに融資したお金を取り戻すように命令をしている場面】

上司「ただ大阪西支店で回収不可能と思われた5億の損失を見事に取り返した。その実績が買われたのかもしれない。」

半沢「5億と120億では桁が二つ違います。」

上司「それでもやってもらわなければ困る。」

TBS 系列『半沢直樹』第6話

そして、「心理的な人間関係」は個人の心理や感情によって決められるものなので、絶対的なものではなく、様々な要素によって変わりうる。その変わる頻度で言えば、一律に言えない。比較的に長期間その関係が保持する場合もあれば、同じ会話参加者であっても、発話場面や発話の内容によって瞬時的に変わる場合もある。また、「社会的な人間関係」は上下で判断するものであるが、「心理的な人間関係」は親近度で判断するものである。

発話の公式度は「心理的な人間関係」と次のような関係がある。話し手と聞き手の間の関係が近ければ近いほど、発話の公式度が下がり、未完結文の使用もしやすくなるということが推測できる。例えば、(20)で、話し手は社会的な地位が下位にある柚子で、聞き手は上位にある先生である。(20)の話し手の未完結文が許容されたのは、話し手と聞き手の親しい「心理的な人間関係」が関与していると言える。

(20) 【先生は柚子の母が経営しているレストランで下宿している】

先生「どこ行くんだ？ これ」

柚子「今日も白尾君練習来てないから」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第2話

5. 調査の結果

4では、伝達の媒体における違いを確認した後に、話し言葉に限定し、発話の公式度に関与する外的要素と内的要素を考察しながら、未完結文の使用制限を理論的に考察した。実際の使

用では、未完結文の形式によってそれぞれ違う性質が現れる場合もあるので、本稿はテレビドラマを中心に、ランダムに131個の未完結文を抽出し、そこに現れる特徴を分析した。

5.1 未完結文の使用状況のまとめ

本稿では、「たら」「ば」「と」「ので／んで」「から」「のに」「が／けど」「し」「て」を対象として、外的要素と内的要素を総合的に考慮し、発話の内容、発話場所、潜在的聞き手の存否、社会的な人間関係⁶の四つの項目に分けて未完結文の特徴をまとめた。その結果は表2のようになる。

表2 未完結文における使用状況のまとめ

接続助詞	総数	発話の内容		発話場所		潜在的聞き手		社会的な人間関係		
		雑談	仕事	私的	公的	有	無	話し手は上	話し手は下	平等
「たら／ば」	7	5	2	5	2	0	7	1	1	5
「と」	7	7	0	5	2	3	4	0	0	7
「て」	17	14	3	6	11	4	13	1	4	12
「ので」	10	7	3	7	3	4	6	1	2	7
「から」	39	29	10	19	20	7	32	10	4	25
「のに」	13	10	3	7	6	7	6	3	2	8
「し」	15	13	2	11	4	0	15	3	2	10
「が／けど」	23	15	8	13	10	11	12	3	7	13
総計	131	100	31	73	58	36	95	22	22	87
		76%	24%	56%	44%	27%	73%	17%	17%	66%

個別の表現を除き、未完結文全体の特徴から言えば、発話の内容が仕事関係より雑談のほうが、また潜在的聞き手が存在する場面よりしない場面のほうが、人間関係が上下であるときより平等であるときのほうが、未完結文の使用頻度がより高いことがわかった。発話の場所に関して、私的な場所であれ、公的な場所であれ、未完結文の使用は明確な違いがないと言える。

5.2 内的要素における制約と逸脱

5.2.1 形式の不完全による制約と逸脱

未完結文の発話の内容は共通的に三つの特徴がある。即ち「断言回避の機能を持つ」「会話参

⁶ 「心理的な人間関係」の判断基準が科学的に決めにくいことを考慮した上で、表2では「社会的な人間関係」のみをまとめた。

加者の共通認識が必要とされる」「相手の推論が必要とされる」。次は、それぞれの特徴に従って、実際の使用での制約を考察する。

まず、「断言回避の機能を持つ」ことについて、加藤（2009a）でも述べたように、未完結文は文を閉じていないので、断言を回避するという機能がある。逆に考えれば、断言しなければならない場合、つまり確定することが要求される場合は未完結文が使用しにくい。例えば、(21)の場面で、聞き手である同僚1の発話に対して、話し手である同僚2の明確な答えが必要となるので、「けど」で終わる未完結文は不自然である。

(21) 【一日目の仕事が終わって、みんなはお別れの挨拶をしている場面】

同僚1 「では、明日10時に中央郵便局の前で」

同僚2* 「はい。わかりましたけど。」

そして、「会話参加者の共通認識が必要とされる」ことについて、形式上が不完全であることは、言い換えれば、話し手が発話の途中でやめ、話し手の伝達しようとする情報や意図が、文法形式上に現れている言葉以上にあるとも理解できる。つまり、未完結文を通して話し手の意図を理解するには、相手は文法形式上に欠如している内容を自分で補完しなければならない。そうすると、相手が話し手の意図を正確に理解できるかどうかは、欠如している内容が話し手と相手の共通認識になっているかどうかによって決められる。言い換えれば、未完結文の欠如している内容が話し手と相手の共通認識になっていない場合に、未完結文は使用しづらい。例えば、(22)で、話し手は美織で、聞き手は航太である。(22)は医者になる理由についての発話である。話し手の「思ってたんだ」という過去形から、発話時点で話し手の考えがもう既に変わったということが推論できる。聞き手のその後の「うん？」という疑問から、話し手の考えが変わったことが、聞き手にとって未知の情報であると推測できる。そこで、話し手は「けど」で終わっている未完結文を使ったが、聞き手に共通している情報がないので、発話の情報伝達は成功できず、話し手の発話は独話に近い性質を持つと考えられる。

(22) 【なぜ医者になったかという話について】

美織 「患者さんを自分の手で助けてさ、私も「ありがとう」って感謝されたいなって。」

航太 「いや、すばらしいね。そうやって、人の命を救いたいっていう気持ち。」

美織 「って思ってたんだけどね。」

航太 「うん？」

美織 「なんでもない。」

フジテレビ系列『海の上の診療所』第4話

最後に、「相手の推論が必要とされる」ことについて、未完結文は形式上が未完結であり、相手の推論が必要とされるので、未完結文は相手に働きかけの性質を持つ場合が多い。それによって、未完結文は基本的に聞き手のいない独り言や独話には用いられないはずである。しかし、実際の考察では、発話の内容の意味によって、「のに」は例外的に独り言でも頻繁的に使用されていることが分かった。

「のに」は事実が話し手の考えとずれているときに使われているので、事実に対する話し手の強い個人的な不満を含めている言葉として考えられる。そこで、「のに」は基本的に話し手の感情を表し、働きかけ性質のない発話として現れることが多い。例えば、(23)は、雨の中で、数人の生徒が慌てて洗濯物を外から部屋へ持って行く場面である。雨にぬれると風邪を引きやすいことと、風邪になると試験中普段通りに質問を解決できない可能性もあるということを考えると、話し手の生徒1の未完結文は、「もうすぐ試験だってのに、何でこんなことしなきゃいけないの」などの自分の不満を表すような主節を補完できる。話し手が(23)の未完結文を話したときに、周りに同級生が同じ作業をやっており、話し手は他者の存在が意識できるので、聞き手が存在すると言える。しかし、同級生達はみんな走りながら作業をやっているの、話し手の話に耳をかけて聞いていない可能性が高い。そのことは話し手も認識できるはずである。そこで、聞き手が存在するにもかかわらず、(23)は独話の性質を持っていると言える。

(23) 【雨の中で生徒達が慌てて干している洗濯物を部屋へ持っていく場面】

生徒1 「もう最悪だ。もうすぐ試験だってのに。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第3話

以上より、未完結文は通常聞き手が存在しない独話では使用しづらいが、「のに」の意味機能によって、「のに」で終わる未完結文は特別に独話でも使用可能であると言える。

5.2.2 行為要求における制約と逸脱

発話の内容との関係で、形式ごとに未完結文の例を考察すると、一つの共通点が見られる。相手に行為の実施を要求するときに、未完結文の使用には比較的強い制約がある。話し手と聞き手は平等関係にある場合がほとんどであるが、話し手は聞き手より下位にあるときは使用が制限されている。

Kato (2014) は条件節の典型的な非従属化が「～たら」と「～ば」で終わるものであり、基本的に省略される主節が疑問文に限定され、アドバイスや勧誘を表すという特徴があると述べている。本稿で集めた「たら」「ば」の7例を考察した結果、「たら」「ば」で終わる未完結文は意味機能が固定されている側面があるとわかった。「ば」には聞き手に動作の実施を要求する機能しかないが、「たら」には聞き手に動作の実施を要求することと知識の提供を要求することと

いう二つの機能がある。

そして、集めた7例の「と」の未完結文を考察した結果、「用言の否定＋と」の形で現れ、主節は「だめだ」などの消極的な評価を含める文に復元でき、聞き手に動作の実施を要求することが多いということが分かった。例えば、(24)の例である。

(24) 【昼休み中に食堂で世間話が終わって、仕事に戻ろうとする場面で】

手塚「がんばろう。」

小鳥「そろそろ、時間。戻らないと。」

フジテレビ系列『ミス・パイロット』第3話

表2にある「たら／ば」「と」に注目すると、「たら」の1例以外に、総計14例のうち12例は話し手と聞き手が平等関係にある場合、1例は話し手が上位にある場合である。話し手が下位にある1例の例外があるが、それを考察すると、(25)に示しているように、聞き手に実際の行為を要求しているのではなく、知識の提供を要求していることがわかる。

(25) 【新しく開発された薬を山田という患者に使わせるかどうかについて】

部下「この患者で試すということですか？」

教授「病院にとって、患者は二種類。絶対死なせてはならない患者とそれ以外の患者だ。」

部下「でも、万が一副作用が起きたら」

教授「彼は術後間もない進行胃がんの患者だ。いつ何が起きたとしても不自然はない。」

TBS 系列『アリスの棘』第4話

但し、この行為要求における制約は、話し手のフェイスが侵害された場合に、逸脱するような例が見られる。例えば、(26)で、話し手は下位にある麻木事務官で、聞き手は上位にある久利生検事である。(26)の形式文脈から、話し手の未完結文を「ヤンキーやってたのは10年前ですから、その呼び方をやめてください」のように補完できる。つまり、(26)で、話し手は未完結文を通して聞き手に行為を要求している。それが許容されたのは、聞き手の「ヤンキー事務官」という呼び方が話し手のフェイスを侵害したからである。

(26) ⁷【久利生検事と自分の事務官である麻木は事務室から会社の共用スペースに出て外出しようとするところ、宇野検事は共用スペースに座って聞いている場面】

久利生検事「ほら。行くぞ、元ヤン。」

⁷ (26)は(11)の再掲である。

麻木事務官「その呼び方はやめてください。携帯忘れた。」

久利生検事「何やってんだよ。ほら、行くぞ。ヤンキー事務官、レッツゴー」

麻木事務官「だから、ヤンキーやってたのは10年前ですから。」

フジテレビ系列『HERO 2』第4話

以上より、逸脱の例がありながら、未完結文は聞き手に行為を要求する機能を表すときに、話し手と聞き手の人間関係に比較的厳しい制約があり、話し手は聞き手より下位にある場合は使用しにくい。

5.3 外的要素における制約と逸脱

4.3と4.4で発話の公式性に関わる要素を分析しながら、公的な場所と潜在的な聞き手がたくさんいる場面で、「社会的な人間関係」において上位にある人に対して、未完結文の使用が制限されていると述べた。実際の使用では、発話の公式度はそれらの要素が総合的に決めるものなので、個別の要素における制約から逸脱するような例も見られる。

まず、外的要素より、内的要素が優先されるような場合が見られる。つまり、公的な場所で、「社会的な人間関係」において上位にある相手でありながら、発話の内容が雑談になっているからという理由だけで、未完結文の使用制約が緩和される場合が見られる。例えば、(27)で、話し手は20代の吉成で、聞き手は40代の副編集長である。「社会的な人間関係」において、話し手は下位、聞き手は上位にある。二人は初めて会う関係なので、「心理的な人間関係」は特に親近感がないはずである。発話の場所は会社であるが、場面は二人きりである。ここで、理論的に考えるなら、(27)で、聞き手に負担をかけるような未完結文は使用しにくいはずである。それにもかかわらず、(27)で話し手の未完結文が許容されたのは、聞き手の質問は話し手のプライベートについてのもので、発話の内容が雑談であるからである。

(27) 【入社の初日に、副編集長は新人アルバイトの吉成が会社に入る経緯について】

副編集長「編集長のお母さんと？」

吉成「そう。お友達なんです。それでお願いしてくれて」

フジテレビ系列『FIRST CLASS』第1話

また、「場所」「聞き手の性質」「社会的な人間関係」「心理的な人間関係」という四つの外的要素において、「心理的な人間関係」が優先されるような場合も見られる。例えば、(28)で、話し手は部下の古里課長で、聞き手は貝瀬支店長である。「社会的な人間関係」において、話し手は下位、聞き手は上位にある。発話の場所は会社で、内容も仕事関係の話になっているので、発話は公式度が高く、未完結文が使用しにくいはずである。しかし、(28)の発話には、話し手と聞

き手が融資事件を共謀したという知識文脈⁸がある。つまり、話し手と聞き手は同じグループにあり、比較的親近的な「心理的な人間関係」である。話し手は「が」で発話を終えているが、その欠如された内容は二人が共通に認識できる会社の同僚に知られてまずいものである。内容の共通認識は二人の親近的な関係によっても理解可能なので、場面が公式であるにもかかわらず、(28)で、下位にある話し手の未完結文が許容されたのは、話し手と聞き手の親近的な「心理的な人間関係」によると考えられる。

(28) 【半沢と会った後、古里課長は支店長の事務室で報告をしている場面】

貝瀬支店長「帰ったか？」

古里課長「はい。随分としつこく伊勢島ホテルについて聞かれましたが。」

貝瀬支店長「古里、厄介事は…分かってるな？」

古里課長「はい。」

TBS 系列『半沢直樹』第 6 話

6. まとめ

本稿では、「ので／んで」「から」「たら」「ば」「と」「のに」「が／けど」「し」「て」で終わる未完結文を研究対象に限定し、131 個の例文に基づき、外的要素と内的要素に分け、発話の公式度に関与する要素をまとめながら、未完結文の使用における制約を考察した。その結果、次の三点が分かった。まず、「発話の内容」「聞き手の性質」「社会的な人間関係」「心理的な人間関係」は発話の公式度に関与し、「発話の内容」と「心理的な人間関係」が優先される場合があること。また、発話の内容が雑談で、潜在的聞き手は存在しない場面、人間関係が平等であるときは、未完結文の使用率が高いこと。最後に、逸脱の例がありながら、独話や聞き手に行為を要求するときは、未完結文の使用が制限されていること。本稿では、個別の要素に分けて未完結文の使用について考察したが、各要素間でどのように総合的に関与しているかは詳しく分析できなかった。それを今後の課題とする。

(りゅう ぎょうへい・言語文学専攻)

⁸ 知識文脈の定義は加藤 (2009b) に従う。知識文脈は「セッションが開始する以前から、セッション参加者が持っている知識のうち、言語知識を除外した世界知識にあたるもの」である (加藤 2009b : 214)。

参考文献

- 上原聡・福島悦子 (2004) 「自然談話における『裸の文末形式』の用法と機能」『世界の日本語教育』14号 pp.109-123
- 加藤重広 (2009a) 『その言い方が人を怒らせる—ことばの危機管理術』ちくま新書
- (2009b) 「動的文脈論再考」『北海道大学文学研究科紀要』128号 pp.195-223
- (2013) 「日本語の語用特性と複文の単文化」益岡隆志ほか編『日本語の複文構文』ひつじ書房
- 金美貞 (2007) 「接客言語行動における非定型表現」『待兼山論叢 日本学篇』41 pp.19-37
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 山本裕子 (2004) 「発話を形成する要素についての一考察」『名古屋女子大学紀要』50 pp.153-166
- Brown, P. & Levinson, S. (1987 [1978]) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press (田中典子訳 (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社)
- Kato, Shigehiro. 2014. "Insubordination types in Japanese -What facilitates them?-. *Asian and African Languages and Linguistics*, Vol. 8. pp. 9-30, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS.